

幻身についてのプトン・ツォンカパの見解(2)

——ツォンカパ自身による浄・不浄の幻身の定義について——

平 岡 宏 一

はじめに

前回の発表では Pañcakrama の第三次第幻身の、特に『鏡の影像の譬え』の解釈をめぐるプトン・ツォンカパ両者の解釈の違いを問題にした。その中でツォンカパはプトン説を次のように批判していると紹介した。

「自らの身体を影像の譬えとなぞらえて快・不快によって貪欲・瞋恚の粗い妄分別を否定するのが不浄の幻身とする。また自ら尊とし、更に幻の如しと観想してから快・不快を平等となすのみを清浄な幻身と考える以外に特別なものがないならば無上瑜伽と他の道と共通の一般的な意味での幻と、第三次第幻身の隠された意味での幻と、第五次第の双入の幻身等の簡単な違いさえも分ける事が出来ていないと思える。」[『五次第の明照』(東北 No. 5302) Ja 222A]

このようにツォンカパはプトンの清浄・不浄の幻身の説明を全面否定している。しかしそれではツォンカパ自身は清浄と不浄の違いをどのように考えていたのか。それが今回の発表のテーマである。ゲルク派で流布している幻身の定義についての従来の説を検証して、その問題点を明らかにし、ツォンカパ自身の想定していた清浄・不浄の幻身の定義を解明したい。

1. ツォンカパの想定した「譬えの光明」から「無学の双入」成就までの過程

ツォンカパ自身の清浄と不浄の幻身の定義を知るためにはまず、幻身成就の過程を含むツォンカパの想定した「譬えの光明」から「無学の双入」までの過程を検証する必要がある。ゲルク派の典籍を元にまとめてみると次のようである。

①究極の定寂心の譬えの光明に等引→②究極の定寂心の譬えの光明より起きると同時に究極の定寂心の譬えの光明を共働縁、譬えの光明の乗物である「風」(ルン)を質料因として不浄の幻身を元の体から体外離脱して達成→③勝義の光明に

等引すると同時に不浄の幻身は虹が消えるように消滅→④勝義の光明より起きると同時に勝義の光明を共働縁、勝義の光明の乗物である「風」(ルン)を質料因として清浄の幻身の実現と、煩惱障を捨て尽くした“捨”の達成(「捨の双入」)→⑤再び勝義の光明に等引すると、既に実現している清浄な幻身と合わせて「証徳の双入」の達成→⑥所知障を減するとともに「無学の双入」を達成して仏陀の位を得る。

2. 従来のゲルク派説の検証

上に述べた成仏への過程の中で③の勝義の光明に等引すると同時に不浄の幻身に虹のように消えることや、また④の勝義の光明より起きるとともに煩惱障を捨てることと、清浄な幻身を成就することが同時であることなどから、従来、幻身の清浄と不浄については、煩惱障で不浄であるから不浄の幻身、煩惱障を捨てた故に清浄な幻身とする解釈が取られてきた。例えば19～20世紀初頭の学僧シェラブ=ギャムツォは『究竟次第の覚書』の中で、「煩惱を捨ててない故に不浄の幻身である。」(GO 35A)とし、また「煩惱障をすっかり捨てた清浄な幻身を得た」(GO 38A)としている。またヤンチェン=ガロも『秘密集会の地・道』(東北No. 6574)の中で、「それはまた煩惱障で不浄であるから不浄の幻身(或いは)有漏の智身という」(10A)と述べている。過日、東洋文庫のゲシェー・テンパ=ギャルツェン師にお伺いしたところ、幻身の清浄と不浄の違いは煩惱障を捨てたか否かとする説がゲルク派では一般的と述べておられた。また田中公明氏はその著書『チベット密教』で「このような光明の体験から、再び逆行して「幻身」を発生させると、今度は光明によって煩惱で浄化されたので、「清浄な幻身」が出現する。」(P. 207)と述べられているのもこの従来の説に準拠してのことであろう。

3. 従来のゲルク派説の疑問点

しかし煩惱障を捨てた故に、清浄な幻身が仏の色身へと途切れることなく繋がる同類因と成りうるならば、何故波羅蜜乗の第十地の最後有の菩薩に備わる相好が仏の色身の同類因と成らないとゲルク派では定義しうるのだろうか。パンチェン・ロサン・チョゲルはそれについて次のように述べている。「波羅蜜乗の主張するそれ(菩薩の相好)は無明の習気の地と無漏の業によって受けた相好である。無漏の習気の地とは「所知障」である。それによってできた体と、所知障の対治である「無間道」の2つを同一体性とするのは無理である。」「『五次第の真髓』

(大谷 No.10370) KA 16A] と。

つまり、波羅蜜乗の菩薩の相好は所知障でできた体であるから、所知障の実際の対治である、菩薩の心に実現される「無間道」と同一体性になることはない、即ち心身が本性無別である双入に移行する同類因とは成りえないとするのである。またパンチェン・ロサン・チョゲルは『五次第の真髓』の中で所知障を捨てていない波羅蜜乗の第十地の菩薩の相好は所知障を減する段階で浄化されてしまふ、即ち流れを断たれてしまふ旨 (KA 65A) を述べている。

さて清浄な幻身も、単に煩惱障を捨てた故に清浄と定義するならば、清浄な幻身も所知障を捨てる段階で浄化されなくてはならない筈である。従って従来の説ではこの矛盾を説明しえないのである。

4. ツォンカパの幻身定義についての筆者の仮説

この謎を解く鍵は清浄な幻身の共働縁と質料因と性質にあると私は思う。清浄な幻身の共働縁と質料因とは先にも述べたように勝義の光明と、その乗物である「風」(ルン)であった。ツォンカパ勝義の光明について『五次第の明照』の中で「有学の道において大樂智が真实性の意味を直接に悟入した勝義の光明」(JA 80B)と述べている。つまり勝義の光明とは大樂智が空性を直観的に理解する智慧としているわけだが、これに関して中観帰謬論派独自の有漏・無漏の定義を知る必要がある。ツォンカパは中観帰謬論派では「無漏」とは単に煩惱障を離れていることのみをさすのではなく、その習気、即ち所知障の染汚をも離れた状態をさすとし、また仏地に至るまでの「無漏の智慧」と定義できるものは聖者の無分別智のみとしている(『入中論広釈“密意明解” VARANASI/1988 P.32~33)。さて、勝義の光明こそはこの聖者の無分別智にあたる。光明とその乗物である「風」(ルン)は同一本性であり、これらを原因として成立しているからこそ清浄な幻身もまた、その性質が無漏となり、仏の色身の直接の同類因と成りうるのである。ちなみに「譬えの光明」は空性を共相により理解する智慧である。この智慧は空性を認識対象にしているが、無分別智でないために有漏の性質といえる。従ってこれを原因として成立した不浄の幻身もまた有漏なのである。このようにツォンカパは幻身の清浄・不浄の性質の決定を煩惱障行者の煩惱障の有無ではなく、幻身自体の性質が有漏か、無漏かという事に依っていると推察される。(注略)

〈キーワード〉 幻身, プトン, ツォンカパ

(高野山大学院)